

た事がわかり、唱題の功德は読誦や書写に次ぐものだった事がわかる。同時により大きな功德を得る為には、智恵が必要であった事も想起される。

また、事例により、覚超・源信・覚運の比叡山の僧をはじめ、藤原氏等の貴族や更に庶民層に及んで唱題が行ぜられていた事がわかる。当時の庶民が、識字能力が低い事や經典を手にすることが困難だった事を考えると、庶民にとって唱題は、法華經修行の最も入りやすい形であった事をも想起させる。

日蓮聖人は『唱法華題目鈔』『南条兵衛七郎殿御書』等において、これら平安時代の唱題の特徴に通ずる、雑行性や比叡山の僧侶の法華經修行についても触れており、日蓮聖人に先行する法華經信仰・唱題を認識されていた事がわかる。

しかし、『唱法華題目鈔』等の佐渡配流以前の遺文において、法華經純一で智恵よりも信が大切であり、唱題を第一の修行とする思想が見られ、同時に自らを「法華經の行者」と規定し、他の「法華經の持經者」と違う立場にある事を表明されている。

以上のように、日蓮聖人は、その形態においては平安時代の法華經修行を継承しつつも、唱題弘通の出発点よ

り、唱題を主体とし、一切衆生救済の要法として理論化していき、法華經純一信仰、唱題の統一を行う、法華經色誦の行者としての立場をとられていたのである。

今後、日蓮聖人の独自の唱題思想を更に明らかに、題目論の考察を進めたい。

本迹論の一考察

―桂林日隆の『私新抄』に表れた本迹論―

三 吉 廣 明

本迹同体異体論は、一致派本国寺日伝と日陣の論争が起こつてより、今日までその解決をみないのである。その議論の注意点は一致派は約宗勝劣、約体一致を立て、体玄義に議論の場をしぼったことであり、日陣は必然的に体玄義の勝劣を主張した点である。

浅井円道先生は勝劣諸論師の本迹論を検討され、日隆の本迹論について、

一、日隆には実相同体の一致義が存する。

二、法体勝劣を宗家の体という場に限った。

と指摘され、「勝劣派に一致義が存することは、(中略)、両者妥協の余地がある。」と述べられている。(大崎学報一一一号p.15「法体勝劣論の考察」)

さて日隆の『私新抄』によれば体玄義は五重玄の一つとしてみるべきで、本迹における致劣を体章に限り論じていない。そこで日隆は本迹と五重玄義の関係を説いて、五重玄を総別に分け、名玄義は総、体宗用の三章は別とし、別とは総の力用とされ、総別は本迹判の意味で「本」とは総である「本地」のことで根本総体、能生能開であり、従って別である「迹」は「迹中」で、本地の力用となつて、所生・所開であると説くのである。

さらに日隆は本迹の意義を権実判との関係から説いて、権実判はその判断基準を経体の龜妙・偏円に置いて、法華経が他経に優れることを明らかにする。その上に本迹判が立つ由縁は権実判では、爾前と法華における衆生成仏の勝劣は立たない、即ち本迹判は衆生成仏の根拠を明らかにして、そこに勝劣が立つと説く。日隆は本迹勝劣を本地迹中の衆生成仏の勝劣と規定したのである。

日隆が本迹を衆生成仏の不同勝劣と規定したことは、本迹を仏の教化の事実(三世益物)たる三五下種と捉え

たと言うことであり、これを堅の本迹と名づけた。これは衆生成仏の根拠は下種にあると言うことであり、その下種を説く教法が本地法華経即ち本門八品であると言うのである。

日隆はこのように論じた上で、実相について次のように考察をあたえている。

迹中雖有_レ実相_ニ約_レ仏_ニ積影_ニ実相_ニ約_レ衆生_ニ得道_ニ脱益_ニ実相也_ニ脱其_レ性_ニ婦_ニ根本_ニ者也_ニ実相_ノ性_ガ虚_{ナル}者也_ニ頭本_{スレバ}本地_ノ一_ニ実相_ト成_テ迹_ノ実相_ハ虚_無ノ_体ト_成ル_ニ(中略)如_レ此_レ得_レ意_今昔_相望_於堅_本迹_ニ実相_ニ浅深_{勝劣}無_レ疑_者也。(宗全第八卷『私新抄』p.99)

このように本迹実相には体と影の浅深勝劣があると説いている。

つまり日隆の本迹勝劣論は、陣伝論争の焦点であった、体章の勝劣(日隆によれば実相同異は権実判につきる。)をいうのではなく、種熟脱を内容とした衆生成仏の根本と枝末という勝劣を言うのである。